

令和元年度第5回 神奈川県ボランティア活動推進基金審査会

令和元年12月18日(水) 13:30~20:10

■ 開会

(基金事業課長から本日の予定を説明)

- 全員出席、委員9名での開催予定。
- 会議の流れを説明
 - ・ 15時から、令和2年度ボランティア団体成長支援事業のプレゼン審査
 - ・ 16時20分から、プレゼン審査に対する選考
 - ・ 18時10分から、選考結果の発表
 - ・ 18時55分から、令和元年度ボランティア活動奨励賞の選考
 - ・ 20時閉会予定

(審査会長から開会の宣言)

- 令和元年度第5回神奈川県ボランティア活動推進基金審査会を開会する。
- 率直な意見交換を通じて公平な審査をする必要があり、神奈川県情報公開条例第25条第1項第1号に該当することから非公開とする。
ただし、プレゼンテーション審査は公開とする。

■ 審議事項1 令和2年度ボランティア団体成長支援事業の選考

(基金事業課長から以下について説明)

- ボランティア団体成長支援事業の応募状況
- 来年度のボランティア団体成長支援事業に係る予算
- 審査委員と利害関係のある団体からの提案なし

(事務局から事前調査結果等について説明(資料1・参考資料2))

(委員による審議)

- ボランティア団体成長支援事業への提案事業に係るプレゼンテーション審査における確認事項等について検討した。

(プレゼンテーション審査の実施)

- ボランティア団体成長支援事業への提案事業に対するプレゼンテーション審査を次のとおり行った。

【かながわコミュニティ・マネジメント基盤強化事業】

特定非営利活動法人CRファクトリー（以下「CRファクトリー」という。）によるプレゼンテーション実施。

【質疑】

（為崎委員）

4者共同での運営体制をご提案いただいた。昨年度も県内の団体との連携を内容とするご提案をいただいたが、今回、この4者での運営体制になった経緯を聞きたい。

（CRファクトリー）

当団体は、日ごろから各地の中間支援組織との協働を軸としている。3者とはこれまでも協働、連携の実績があったというのが地盤にある。また、今回の提案では、昨年度の2者に加えて、県内の市民活動を大局的に見ていただくことを期待して、子どもの未来サポートオフィスに入っていたいただいたという経緯がある。

（為崎委員）

若い人材への発信はアクションポート横浜が得意とする分野であると思うが、以前アクションポート横浜が成長支援事業を実施したときのテーマも、若い人材の導入だった。そのときの事業と今回の事業の違いは何か。

（アクションポート横浜）

基本的に目指しているところは変わらない。ただ、これまでの成果やそのときに得た知見を事業に活かしていきたいと思っている。以前は、子育て世代は対象に入っていなかった。

（為崎委員）

将来的には、CRファクトリー以外の3団体のうち、どこがリーダーシップをとるのか。

（CRファクトリー）

まだどこが幹事団体となるかまでは考えていない。各団体、それぞれメインターゲットが異なるので、そのターゲットごとに事業を分けるという方法もあると思うし、CRファクトリーに所属していない人をファシリテーターとして養成することも同時に行っていくので、CRファクトリーがいなくてもノウハウ移転が進むような下準備はできると考えている。

（為崎委員）

県内の団体が中心となって基盤をつくっていくのに、どの程度の年数を想定しているか。

(CRファクトリー)

1年目は、あり方を見直すことの必要性を理解してもらうとともに、効果を感じてもらえる団体を増やしていくという種まきの期間。2年目は、CRファクトリーの関与を薄めながら、1年目で学んだ気付きを生かして3団体を中心としたノウハウ移転の期間。3年目は、CRファクトリーがほぼ関与しないという形になればよいと考えている。

(為崎委員)

若い人材のマッチングを具体的にどのように行うのかが見えにくかったが、例えば、コミュニティ塾は、若い人材と団体が一緒に参加してその団体の計画を設計するという認識でよいか。

(CRファクトリー)

マッチングに関しては何点かある。まず、コミュニティフォーラムの場での出会いが生まれていくという副次的効果を狙っていききたい。また、コミュニティ塾やラボ、そのうち特にラボでは、団体のビジョンを問い直すということと同時並行で、個人としてどんな社会貢献をしたいのか、自分の人生においてボランティア活動がなぜ大事なのかを深く問うていく。そこから、本当にやりたいことを見出して、団体とマッチングすることを狙っている。継続的に活動するためにはフォローアップが必要だと考えており、その後も支援という形で接点を持っていききたい。

(為崎委員)

もし受託した場合には来年度の成果として、定着するかは別として、若手の人材をマッチングして、若手が団体に入っていくところまでやるということによいか。

(CRファクトリー)

マッチングとして、単なるお見合いのようなものを短期的に狙っているということではない。組織的ビジョンが整ってはいはじめて、新たな人材を受け入れることができる団体になっていくと思うので、単年度でとにかくたくさんマッチングを生み出すということは狙っていない。

(子どもの未来サポートオフィス)

補足すると、私はかながわコミュニティカレッジの運営委員も務めているが、そちらでは受講された方をどう活動団体にマッチングできるかということが非常に重要になっている。団体側の体制が整っていないと、うまくマッチングができない。そのため、団体も個人も、ひとりひとりの人生にとってその活動がどのような意味を持ち、参加することでどのような社会を作っていくのかというビジョンを学び合っていく。そのためには、講座を実施するだけでなく伴走支援が必要であると考え、成長支援事

業に提案した。

(水澤委員)

人と組織の継続的な基盤強化を目標にした提案だと思う。団体は、意外と組織のマネジメントからかけ離れている。そういう団体をどう引っ張り込むかが大切だと思うが、そういった部分は、こまちぷらす等の役割という理解でよいか。

(CRファクトリー)

組織マネジメントというのは後回しになりやすい一方、スポーツ選手における健康的な身体と同じで、そこが悪化すると継続的な活動が難しくなる。

(こまちぷらす)

社会課題の解決のために、スキルを持つ人を中心にチームを作るという考え方もあるが、これからの時代は、一緒になってコミュニティを作る中で、お互いの能力を開発していくことが重要である。コミュニティや人間関係は、色々な団体が抱えている大きな課題である。そこに対応できるような形でこのプログラムを提供したい。

私達は法人を立ち上げて七年目だが、やはり最初は組織マネジメントにまで意識が及んでいなかった。代表者やコアメンバーだけが頑張ってしまうという段階から、組織として動くという段階にたどりつくのはとても難しい。どの団体も苦しい思いをしてそこを乗り越えていくが、そのときに支援があれば、そのステージを越えていけると思う。

(水澤委員)

コミュニティ・マネジメントとは、わかりやすく言うと何なのか。

(CRファクトリー)

端的に言うと、組織内の人間関係、コミュニケーションの部分を温めていくということ。どうしても事業の仕組みや計画、資金調達等に目が行きがちだが、まずはメンバー間の信頼関係や相互理解を深めていくことを、コミュニティ・マネジメントと呼んでいる。

【中間支援組織の連携によるプロボノかながわ展開事業】

特定非営利活動法人湘南NPOサポートセンター（以下「湘南NPOサポートセンター」という。）によるプレゼンテーション実施。

【質疑】

(田中委員)

これまではサービスグラントとの連携で、ワーカーの募集や活動の場の提供など一つの仕組みを作られてきたと思う。これを一つの完成形として、次の3年間で定着さ

せようという提案なのか。あるいは、サービスグラントが構築したモデルに新しい要素を加えながら進化をしていくという提案なのか。

(湘南NPOサポートセンター)

これまでサービスグラントや様々な中間支援組織と連携して、事業の成果を感じてきた。サービスグラントが支援対象とする団体には、法人格の有無や活動年数に制限があったが、その制限を無くして草の根の団体のサポートをしたいと考えている。

(田中委員)

すでに県内では、さがみはら市民活動サポートセンターが運営する「たすかるバンク」等、NPOに専門家を派遣して団体支援を行う仕組みがあるが、このような既存の仕組みとの違いや、新しい面はあるか。

(湘南NPOサポートセンター)

プロボノワーカーと団体との関わりの度合いをみると、県内の人材バンクとの気付きの違いを実感している。部分的なものではなく、チームで様々な角度から団体を見ていく。ワーカー同士のつながりもできるし、団体にとっては、色々な視点からの気付きが得られるということを実感している。その部分をもっと強くしていきたい。

(田中委員)

プロボノワーカーの団体への関わりの深さに違いがあるということによいか。

(湘南NPOサポートセンター)

そのとおりである。

(田中委員)

そうした力のあるプロボノワーカーを送り出すために、企業側にどう働きかけるのか。

(湘南NPOサポートセンター)

県でも取り組まれている、SDGsの考え方がある。最近はこうした意識のある企業が非常に増えていると実感している。SDGsを広めることで、社員一人ひとりの意識の向上につながり、会社への貢献度も高まると感じている。そういったことを企業側にも実感してもらい、そこにプロボノを取り入れてもらうことが社会全体の底上げにつながると考えている。

(田中委員)

ぜひそういった理念を事業の中に落とし込んでいただきたいと思う。実際、この3年間の中で、そうした働きかけをどのように行うのか。

(湘南NPOサポートセンター)

7つの協力団体が各エリアにいる。各団体が、自分のいる地域の会社と関わっていけば、県全体の会社に広がっていくと考えている。

(田中委員)

具体的な方策はこれからということか。

(湘南NPOサポートセンター)

そのとおりである。

(田中委員)

この事業を通して、中間支援組織の支援力を高めていくことと、団体側の力を高めていくことの重点の置き方、比率はどのように考えているか。

(湘南NPOサポートセンター)

団体側の力を高めていくことにより重きを置いているが、団体への支援を行っていけば、中間支援組織の支援力も自然に上がっていくと思う。

(田中委員)

団体への支援の副産物として、中間支援組織の支援力も高まるという理解でよいか。

(湘南NPOサポートセンター)

そのとおりである。

(田中委員)

従来のプロボノのあり方から、マッチングやコミュニケートをさらに充実させたいと書いてあるが、現在のマッチングのあり方で不足している点と、それへの対応策を教えてほしい。

(湘南NPOサポートセンター)

これから7団体と検討していくところだが、今は事業スパンが長い。マッチングから成果を出すまで半年くらいかかっている。事業スパンをやや短くして、支援対象を増やしたいと考えている。

(田中委員)

事業スパンを短くするための方策はあるか。

(湘南NPOサポートセンター)

プロボノワーカーは普段仕事をしている。必ずしも深く関わればよいというものではない。ボランティアでできる範囲で支援するというのが大前提。今の仕組みの中で、どのくらい短いスパンであれば関わりやすくなるかというのは我々の今後の検討課題になると思う。

(サービスグラント)

補足すると、今後サービスグラントのノウハウを移転する中で、サービスグラントがこれまでやってきたことも移転できると思う。

事業スパンを短くする方法としては、大きく分けて2つあると思う。まず、成果物を短いスパンで完成させるという方法がある。例えば、広報力の強化のための支援として、ホームページではなく Facebook を作成するといったことが考えられる。また、関係者の参加を必須とする日程をあらかじめ決めることで、それ以降の日程調整にかかる時間のロスを減らすことができる。

(高橋委員)

草の根の団体というのは、具体的にどのような団体か。

(湘南NPOサポートセンター)

具体的に示すのは難しいが、例えば、20年間活動していても、事業規模がずっと変わらず高齢化している団体もあれば、設立してから間もないが、誰かの支援があればもう一歩先に進めるという団体もある。この仕組みが活かせるのは、どちらかというも後者の若い団体だと思う。事業スパンを短くすると、長年やっている団体の改革するのは非常に難しい。そのため、5年目くらいまでの団体をサポートしていくことで、その先の団体運営の基盤が強化されて運営できるようにすることが大切だと思う。

(高橋委員)

今の説明だと、仕組みのほうに団体を合わせるように聞こえてしまう。確認したいのは、提案された仕組みに合うのはどのような団体か、ということではなく、どのような団体を支援したいか、ということである。

また、それに関連して、支援対象団体の選定基準には、団体としての目標が設定されていて、プロボノ支援を受けることによって活動の拡大が期待できる団体と書いてある。しかし、草の根の団体を支援するというのであれば、むしろ選定基準として挙げられているような団体になれるよう支援する、ということになるのではないか。選定基準としてはハードルが高いように思う。もう一度その部分を整理していただき、どのような団体を支援したいと考え、選定基準はそれとどうつながっているのかを教えてください。

(湘南NPOサポートセンター)

この選定基準はサービスグラントのものをベースに設定したものであり、もう少し

検討したいと思っている。草の根の団体にとっては、この基準はやや高いということ
は認識している。もう少しこの基準を易しくすることも検討したい。

【セルフチェックによる組織課題の可視化と組織のリデザイン事業】

特定非営利活動法人藤沢市民活動推進機構（以下「藤沢市民活動推進機構」という。）
によるプレゼンテーション実施。

【質疑】

（中島委員）

グループ分けをしたり、組織の複数の人が参加してその結果を共有したりするとい
う提案内容である。そうすると、ある程度、参加する団体が限られてしまうように思
う。このプログラムで想定している対象について、規模だけではなく具体的にどのよ
うな団体の参加を想定しているのか、教えてほしい。

（藤沢市民活動推進機構）

規模的には、10名いれば十分である。

また、できれば、目指すべき方向性を持っていてほしいと思っているが、必ずしも
参加メンバー全員が全く同じ考えを持っていなくてもよい。

予算規模にも、特に制限は無い。

（中島委員）

この支援による最終的なゴールとして、参加と信頼というものが挙げられるが、そ
こに至る筋道は団体によって違うと思う。その点はどのようにマネジメントするのか。

（藤沢市民活動推進機構）

例えば、ある団体を3つのグループに分け、一定のテーマについて意識の高低をグ
ループごとに算出したとする。グループAは3の意識、グループBは2.8の意識、
グループCは3.5の意識を持っていたとする。この場合において、団体がグループ
AやBの意識をもっと上げたいと考えたときにすべきサポートと、グループCの意識
を下げて全体を平準化したいと考えたときにすべきサポートは異なる。ニーズ等を丁
寧に確認して支援をしていきたいと考えている。

（中島委員）

このプログラムの最後に、参加団体の報告会が予定されている。成果を報告し合っ
て共有するという手法は大変有効だと思う。一方で、支援対象となる団体は、規模も、
持っている課題も様々だと思う。そうした団体が一緒になって報告会を開くことには、
どのような意義があるか。

（藤沢市民活動推進機構）

様々な団体がいることは承知しているが、自己実現というレベルでとどまってしまおうと社会的効果が下がる。そのため、10 団体がこぞって報告をすることによって、そんなやり方があったのか、こんな方向もあったのか、という気付きが得られる場になると思う。

私達も、伴走、並走する中で団体が求める情報を提供しているが、より多様なアイデアや気付きを得る方法として、報告会はとても重要だと考えている。

(中島委員)

想定する対象 10 団体の中に、中間支援組織が 2 団体入っている。これを見ると、現場の団体よりも中間支援団体のほうに重きが置かれてしまうのではないかと懸念するが、そのバランスはどのように考えているのか。

(藤沢市民活動推進機構)

現場の 8 団体を支援することに重きを置いている。

もちろん、中間支援組織も対象とするが、自分達の自己評価をしつつ、8 団体に対して当団体がどのようにアプローチしていくのか、ということをしっかり見てもらう。

中間支援組織を対象とするのは、ノウハウ移転の一環である。

(中島委員)

8 団体の支援に重きを置いているということだが、具体的にどのような方法で募集するのか。

(藤沢市民活動推進機構)

県内各地で説明会を開催する。先日、藤沢市でもトライアルで説明会を開催し、6 団体の参加があった。そのうちの 2 団体からは、実際にこの支援を受けたいとの連絡が来ている。しっかりと情報を提供することで、ニーズを掘り起こすことができるという手ごたえがある。

(中島委員)

予算の中でウェブサイト制作の経費が計上されているが、このウェブサイトの必要性和活用方法を教えてほしい。

(藤沢市民活動推進機構)

参加と信頼を得るためには、情報をどれだけ開示できるかがとても重要である。セキュリティを確保し、しっかりとした運営を行うことで、信頼の置けるウェブサイトを制作するため、これだけの金額を計上した。また、新しい情報をいち早く掲載できるようにするためには、このくらいの費用がかかると想定している。

(尹委員)

セルフチェックシートを使って団体自身が気づきを得るのは非常によいことだと思うが、その気づきを具体的な動きにつなげるのは非常に難しい。実際に、その気づきを動きにつなげるために、具体的にどのように支援するのか。内発性の支援、寄り添う、アドバイスといった説明があったが、もう少し具体的に説明してほしい。

(藤沢市民活動推進機構)

例えば、収支計画書や収支予算書、定款など全て情報を公開していて、いつでも閲覧できる状態にあるのに、そうした状態にあることも知らない団体スタッフがいるということがよくある。総会の開き方が分からない、という相談をしてくる団体の代表者もいる。このような場合には、規約をもう一度見るようアドバイスする。

また、主に現場で活動しているスタッフは活発だが、中間層のモチベーションが落ちているといった相談を受けることもある。このような場合には、最初の頃を思い出すようアドバイスする。

これまで当団体が蓄積してきたノウハウを活かし、団体にとって必要なものをどんどん手配していきたい。当団体は16名の専門家の支援も受けているので、当団体だけで対応できないものについては、そうした専門家による支援を受けられるよう手配している。

(尹委員)

セルフチェックシートには、一般的、基本的な質問が並んでおり、それを使用しても表層的な課題しか浮かび上がってこない可能性があるのではないかと。表層的な課題ではない、その奥にある真の課題に対して、この事業を通じてどのようにアプローチし、フォローしたいと考えているのか。

(藤沢市民活動推進機構)

このシートにそうした一般的、基本的な質問を載せているのは事実である。それは、専門用語を使用せず、かつ直感で答えられるように作ってあるからである。しかし、これを分析することによって団体の強さ、弱さも読みこめるようなシートになっている。この1問目で「はい」が多かったからどうか、3問目で「いいえ」が多かったからどうかといった分析をするわけではない。ミッションとマネジメント、ガバナンスについて分析できるという自信がある。

(尹委員)

関わってくる団体のテーマも、成し遂げたい内容もそれぞれ異なっている。一般的、基本的な質問を用いて、どんな団体にも対応できると考える根拠を改めて教えてほしい。

(藤沢市民活動推進機構)

団体を設立するということが自体が、熱意にあふれた行動である。しかし、必ずしも

その熱意が続くとは限らないし、また熱意だけで物事が順調に進むわけでもない。熱意そのものをもう一度見直すとともに、その熱意を、どのようにガバナンスやマネジメントに落とし込んでいくのかは、団体が継続的に活動していく上で非常に重要な作業である。これは、団体の規模の大小にかかわらず当てはまることだと思う。それに対応するために、このようなシートを作った。

(長坂会長)

セルフチェックシートを用いて分析した後について、言葉としては、リデザイン、伴走支援等が挙げられているが、それが全体の事業のプログラムの中でどのように位置づけられているのか、具体的にどうするのか、というのが明確に書かれていないところに不安がある。ある意味、セルフチェックはすぐにできることだと思う。リデザインや伴走支援が中心的な事業として位置づけられていると考えてよいのか。

(藤沢市民活動推進機構)

まずは分析結果を受け止め、団体の中でそれを共有するのが一番重要。その後、この組織をどのような方向に持っていくかという、中長期の計画を立てる際のベースにしてもらいたいと思っている。

もちろん伴走支援も行うが、団体のスタッフが会議をしたり、皆で協議をしたりしてもらおうことが、この事業の中心的な役割だと思っている。団体の底力を押し上げるためのツールと考えていただきたい。

(委員による審議)

- ボランティア団体成長支援事業への提案事業に対するプレゼンテーション審査の結果を踏まえて審議を行い、対象事業を選考した。

(結果発表)

- 長坂会長が対象事業（「セルフチェックによる組織課題の可視化と組織のリデザイン事業」）を発表し、その後、各担当委員より次のとおりコメントを発表した。

【CRファクトリー】（為崎委員）

コミュニティ・マネジメント力の強化に向けた熱意あるご提案をいただきました。そして、プレゼンテーションや質疑応答を通じて、書面だけからはわからない様々なポイントが見えてきました。まず、貴団体が重点を置くのは、外部から新たな仲間を受け入れる土壌づくりであると理解いたしました。そのためには、内部のメンバー間の相互理解も大切であり、ご提案の事業は、人と組織という根本の重要な部分に切り込むものであると評価いたします。

一方で、単年度内の成果として、その根本の基盤づくりが、実際に若い世代・新たな人材とのマッチングに、どのように結びついていくのか、見えにくい部分がありました。ご承知のように、成長支援事業は単年度の事業委託である中で、掲げられている複数の成果を短期間の間に、どう有効につなげ、支援を受けた団体が前に進んだと実感できる形に仕立てていくのが、今一步明確には伝わってきませんでした。

また、事業の運営体制については県内団体との連携の下、四者共同を図るというものでした。各団体は、それぞれのフィールドで力を発揮していらっしゃる団体ですが、異なった対象層、強みを有して活動している四者が1つの事業のために共同することの大きな意義が見出しにくかったこともあり、残念ですが、今回は採択を見送らせていただきました。

ですが、新たな人材を受け入れる組織基盤づくりと、実際の若い人材のマッチングは、県内のボランティア団体にとって、必要性の高いものです。四者がそれぞれの個性を発揮しながら、共同する有効な部分を見出して、コミュニティ・マネジメント力強化の支援を行っていただくとことを大いに期待しております。

【湘南NPOサポートセンター】（田中委員）

この2年間、サービスグラントとの連携により、プロボノを推進なさってきたご尽力に敬意を表します。また、そのご経験を、県内の団体の皆さんの力で、より地域の実情にあった形で、継承・発展させるべく、ボランティア団体成長支援事業に応募いただいたことにも深く感謝します。

一方で、以下の課題、2点が出されました。第一に、サービスグラントからの発展形として、プレゼンでは、一定規模のNPOに限らず、草の根の若い組織への着目が必要とのことでしたが、審査会としては、活動歴の長い団体こそ、組織の見直しにつながるプロボノの力を必要としているケースも多いと考えています。対象組織を草の根の若い組織とすることについては、再検討が必要と考えます。

第二は、プロボノを送り出す企業への働きかけについてです。既に県内でも「たすかるバンク」等、プロボノ活動や専門家とのマッチング事業が存在します。これらとの違いについて、プレゼンでは、既存の専門家による支援と異なり、「スポット的なお手伝いとどまらず、深い部分で多様な視点を提供することで団体の気づきを促す」ような質を備えた支援を予定しているとのことでした。

もしそのような質のプロボノを求めるならば、ビジネスパーソン個人の志に頼むのみならず、企業が、人事制度にも踏み込んだきちとした仕組みをもってプロボノを送り出す流れが不可欠です。この点、プレゼンでは、各団体がそれぞれの地域で企業に働きかけをするとのことでしたが、企業に対して、プロボノ文化の拡充に向けた根本的な改革を迫るには、中間支援組織としてのネットワークを生かして、より踏み込んだ働きかけが必須と考えます。資料及びプレゼンからは、この点の具体的な見通しを読み取ることができませんでした。

以上から、今回の採択は見送りとなりましたが、ご提案の方向性については大変共感いたします。プロボノ文化が、一層地域に根差し、着実な展開を遂げられるよう、

具体的なアクションの提起と実績づくりに取り組まれることを切に願っています。

【藤沢市民活動推進機構】（中島委員）

中間支援組織としての県内のボランティア団体の課題を明確に認識しており、その課題認識に基づいた地に足が着いた提案と評価しました。問診型シートを、団体内の様々な立場の人たちで検討し、団体自身で課題に気付くとともに、その気付きを関係者で共有することにより団体自らの変革へのエネルギーを開放する、というアプローチは、団体が単にセルフチェックをするのとは異なり、団体の主体性を尊重したものと言えると思います。一方で、「内発性を支援する」という方法は、ともすると、気付きや課題発見し共有した時点で団体が満足してしまうこともあります。伴走支援が、内発性を支援することにとどまらず、その気付きが何らかの形で団体の課題解決につながるようなことができるよう、継続的に支援して下さるようお願いいたします。

問診型シートは、現在まで行われた試験的な活用では、より多くの団体への活用もされているようです。この事業でも、最終的に伴走支援につながる団体に加えて、より多くの団体への活用を検討してほしいと思います。また、団体の人数要件も、より小規模な団体にも門戸が開かれるよう工夫をお願いします。

なお、対象団体の要件や総数については、ボランティア団体成長支援事業の目的に照らし合わせて、再検討してもらおうこととなりますので、ご承知おきください。

この事業によって、団体それぞれのリデザインがなされ、「参加による信頼性の向上」が促進されることを期待しています。

【全体講評】（長坂会長）

成長支援事業を開始してから7年目になる。中間支援というのは、非常に重要なことだと考えている。

CRファクトリーについては、東京の団体であるが、神奈川県内の4団体と連携し、互いに励まし合いながらノウハウを発展させていこうという野心的な取組を提案していただいた。非常に感謝している。4団体が連携して取り組んでいくという仕組みには非常に大きな可能性を感じた。

湘南NPOサポートセンターについては、神奈川県内の中間支援組織を巻き込んで、これまで熱心に取り組んできていただいた。これまでサービスグラントがプロボノを2年間実施してきて、それを受け継いでもう1年間プロボノを実施していただくという提案は魅力的だった。また、7団体がまとまって、神奈川県内で新たな中間支援のネットワークを構築するという仕組みも素晴らしい。

一方で、これまでの2年間で、すでに協力団体の中でノウハウが蓄積されていると思う。また、そもそもプロボノとは何か、ということを考えてとき、それは企業やその従業員が社会貢献をするための仕組みである。しかし、今はまだそれが思うように活発化していない。この先、神奈川県内にプロボノを根付かせていくにあたっては、企業と向き合い、企業を変革させていくようなチャレンジをしていただきたいと思います。

藤沢市民活動推進機構については、セルフチェックシートを通じて気付きを得て、

新しいものが生まれてくるということに期待している。そして、それを踏まえてどのようにリデザインし、また伴走支援をしていくかは、団体としても新たに取り組んでいくことであり、その意欲が評価された。セルフチェックシートを用いた後の事業の計画や展望は、今後また調整を行ってほしい。

日本の市民団体はますます多様化している。どのような中間支援をするのがよいのか、もっと色々な形の中間支援がありうるのではないか。これが、成長支援事業を始めたときから審査会が持っていた問題意識の1つである。今回、藤沢市民活動推進機構の提案事業を採択した背景には、新しい手法にチャレンジしてみたいという思いがある。これが完成すれば、市民団体の新しい評価システムが神奈川県から発信され、全国に広がっていくことも期待できる。

CRファクトリーと湘南NPOサポートセンターにおかれても、引き続き神奈川県内での団体の支援に尽力していただきたい。改めて、ご提案いただいたことにお礼を申し上げる。

■ 審議事項2 令和元年度ボランティア活動奨励賞受賞者の選考

(基金事業課長から以下について説明)

- ボランティア活動奨励賞の推薦状況(資料2)
- 今年度のボランティア活動奨励賞に係る予算
- 審査委員と利害関係のある被推薦者なし

(事務局から事前調査結果等について説明(資料3から5・参考資料3))

(委員による審議)

- ボランティア活動奨励賞への推薦者について審議を行い、被表彰者を選考した。

■ 報告事項 令和2年度協働事業負担金における審査会意見及び現時点調整状況

(事務局から令和2年度協働事業負担金における現時点での調整状況について説明(資料6))

(委員による審議)

- 報告内容について意見交換、質疑応答を行った。

■ 閉会

(原田所長より挨拶)

(審査会長より閉会の宣言)

- 令和元年度第5回神奈川県ボランティア活動推進基金審査会を閉会する。

以上